

「わたしの素敵な王子様」

シンデレラ：本当にね、ものすごく長い列で、やっと私の順番がまわってきて。それで、まあ、元々私のものだから当たり前なんですけど、ガラスの靴は私の足にぴったりでした。そうしたら、王子様が「君はあの時の美しい人だ」って気がついてくださって、そのまま白馬でお城へ連れて行ってくださったの。そして二人はいつまでも幸せに暮らしました、おしまい。

白雪姫：次、私の番ね。私ね、継母がいるんだけど、綺麗って言われれば、まあ、……、くらいのくせに、自分が世界で一番綺麗って思い込んで、ちょっとイタイ人なのね。それで、私は全然そう思っていないんだけど、世界で一番美しいのは白雪姫ですって魔法の鏡が言っちゃって、ホント私は全然あれなんだけど。で、継母に嫉妬されて、毒リンゴを食べさせられて死んじゃったの。でも、たまたま通りかかった王子様がガラスの棺に入れられている私に一目ぼれして、キスをしたら、私、生き返れたの。それで、王子様が白馬でお城へ連れて行ってくださって、そして、二人は永遠に愛し合うことを誓いました、おしまい。

赤ずきん：じゃ、最後はウチね。ウチ、ママに頼まれて、森の向こうのおばあちゃんちにぶどう酒とパンを届けに行ったのね。

シンデレラ：えらいじゃない。

赤ずきん：ママとおばあちゃん、すごい仲悪くて。でも、食べ物届けないと「鬼嫁が私を餓死させようとしてる」とかおばあちゃんが近所の人達に言いまくるから、ウチがいつもお使いさせられんの。で、ウチがおばあちゃんの家に行ったら、なんか、おばあちゃんの見目が微妙なの。で、あれ？おばあちゃんてそんなに耳でかくなくな？とか思ったら、そいつ、おばあちゃんのコスプレしたオオカミで、ウチいきなり食べられちゃって。はあ、何勝手に人のこと食ってんのってマジむかついて。でも、通りかかった猟師さんが、ウチとおばあちゃんを助け出してくれたの。それきっかけで、うちと猟師さんは結ばれて、今日は彼との三ヶ月記念日です、おしまい。

白雪姫：なんか、面白いね、お互いのこと話すのって。

赤ずきん：ね、みんな、運命的な出会い方してるんだね。

※全員同意する

シンデレラ：すごいロマンチックよね。まあ、三人の運命の人が、同一人物じゃなければね。

白雪姫：ねー。シンデレラから連絡もらってびっくりしちゃった。

赤ずきん：ウチも。彼氏のことずっと猟師だと思ってたからマジうけた。

シンデレラ：それで、ここからが本題なんですけど、今日お二人に来ていただいたのは、王子様と別れていただくためです。王子様ともう二度と会わないと約束してください。

白雪姫：ちょっと待ってよ。

赤ずきん：何、勝手に決めてんの。

シンデレラ：私が一番早くに王子様と出会っているんです。すなわち、正式な妻は私です。お二人とも、これまでにについては、まあ、彼が既婚者だったとは知らなかったという言い分を信じて差し上げて、責任は追及いたしません。でも、たとえ、知らなかったとしても、不倫という世間のモラルに反した行為を行ったという事実は、正直、あるわけじゃないですか。それは重く受け止めていただきたいです。そして、もし、今後、私の王子様と関係をお続けになる場合には、訴訟を起こして慰謝料を請求させていただきます。

赤ずきん：はあ、なんでそんなに偉そうにされなきゃなんないの？

白雪姫：なんかさあ、その、世の中の妻達を代表して、私が正義を行いますって感じ？今、話してて超気持ち良かったでしょ。乳首立ってるんじゃないの？

シンデレラ：そういうこと、仰らない方が身のためですよ。全て弁護士さんにご報告致します。

白雪姫：ねえ、ガラスの靴わざと落としたでしょ。

シンデレラ：はあ？

赤ずきん：ああ、男の家にさ、わざとピアス落としてったり、メイク落としを忘れていったりする、アレね。

シンデレラ：違います、ご自分達の倫理観を基準に物事を考えないでいただけますか？

白雪姫：さっきから、妻の権利とか、訴訟とか、王子様のこと本当に愛してるの？ただ、お城での豪華な暮らしやお姫様の立場を守りたいだけじゃないの？王子様が可哀想。私は、彼と一緒にいられれば、それだけで何もいらぬ。だって愛してるから。

赤ずきん：ウチも。彼氏のこと、今まで獵師だと思ってたから、豪華な暮らしとかあてにしてないし。

シンデレラ：私だって、

白雪姫：私、すごく王子様が大好きだから……だから、王子様は忙しいのわかってるけど、一緒にいられない時は、すごい不安で……ずっと食べ続けて吐いちゃったりとか、薬飲まなきゃ夜眠れないし、なんか、昨日の夜も、急に悲しくなって、伝書鳩で王子様に「死にたい」ってメッセージ送ってからリストカットしたんだけど、そしたら、王子様すぐに来てくれて、（この辺から嗚咽交じりに）白雪姫は生きてていいんだよって言うてくれて……

赤ずきん：うわ、重たっ

シンデレラ：でも、この手の女って、セックスはすごいらしいわよ。自分に自信がないから、男がどんな過激なプレイを要求しても断らないし、そこに自分の存在価値を見出すんですって。雑誌に書いてあったわ。

白雪姫：私、王子様と別れるなら、今すぐここで死ぬから。私、いつでも死ぬるって思って生きてるし、彼がいない世界に生き続けることに意味なんか無いし、どうせ毒リンゴで一回死んでるし。

シンデレラ：ねえ、純情ぶるのはやめましょうよ。貴女、お城で暮らす前は、森で、男の人7人と同棲していたんですってね。

白雪姫：それは……継母に追い出されて行くところがない私をみかねて、七人の小人さんがおうちに住まわせてくれて、代わりに私がお料理やお洗濯してあげてたの。その何が悪いの？

赤ずきん：あ、思い出した。おばあちゃんが、森の中にある男性専用のシェアハウスに家出娘が転がり込んで、半分以上の男と関係を持って、すごいふしだらだって怒ってた。あれ白雪姫のことだったんだ。

白雪姫：例えば、誰かとお互いに好きになって真剣に付き合っても、でも、色々あって、彼の友達に相談したら、すごい私の話をちゃんと聞いてくれて、俺のところにくればって言うてくれて。でも、結局、その彼も、私が辛いときに側にいてくれなくて、そしたら、友達だと思ってた彼の友達に、ず

っと好きだったって言われて……そういうこと、二人だってあるでしょ！

シンデレラ：ごめん、ない。

赤ずきん：うちも。

白雪姫：(悲劇のヒロインぼく泣く) 私、何にも悪くないもん、私、すごい可哀想。

シンデレラ：白雪姫は王子様と別れても、次の日には新しい彼氏出来るから。それから、赤ずきんちゃんも、まだ若いんだから、もっと歳相応の男の子と付き合いなさい。

赤ずきん：ウチが若いっていうより、二人がババアなんじゃん。彼もさ、こんなシャワーの水全然弾かないようなおばさん達よく抱けるよね。

シンデレラ：背伸びしたいお年頃なのはわかるけど、大人の女二人で話し合いたいから、ちょっと黙っててもらえる？

赤ずきん：ウチだって、

白雪姫：お子ちゃまはちょっとお口閉じててね。

赤ずきん：はぁ？ウチ、もう12歳だし、クラスの女子みんな彼氏くらいいるし、

シンデレラ：ちょっと待って、今、12歳って言った？

赤ずきん：言った、だから何？

シンデレラ：私、てっきり17才くらいだと思ってた。王子様も12歳って知ってるの？

赤ずきん：彼氏なんだから当たり前じゃん。

白雪姫：王子様ってロリコンだったんだ……それで、セックスの時に、王子様じゃなくておにいちゃんって呼んでって言ってたんだ。

シンデレラ：私の8歳の姪っ子、よくお城に遊びにくるんだけど、いつも王子様がお膝にのせてくれてすごいキスいっぱいしてくれて、それって、やだ、気持ち悪い。

赤ずきん：じゃあ、王子様はウチのものってことで。

白雪姫：赤ずきんちゃんだって、今12歳だから気に入られてるだけで、もう少しして体の色んなところが膨らんできたら、王子様の中ではもうババアだからね。

赤ずきん：…さっきからロリコンロリコン言うけどさ、そっちこそ、死んでた時に、一目ぼれされたんでしょ。それって、死体が好きってことでしょ。ロリコンより、死体に欲情するほうが変態度高くない？

シンデレラ：キスしたら、白雪姫が生き返っちゃって、きっと王子様、内心がっかりしてたわよね。本当は死んでる貴女とあんなことやこんなことがしたかったんだもんね。私は、普通に大人のレディとして出会っているから、

白雪姫：はぁ？ガラスの靴の話、あれ、靴フェチじゃん。好きな女がはいていた靴と足の大きさがぴったり合う女を探し回るってさ、靴に対する執着ハンパないよね。

赤ずきん：あ、最近、学校に上履き盗む変態が出てるんだけど……

白雪姫：ロリコンと靴フェチの合わせ業、それって……

シンデレラ：ちょっと、王子様なわけないでしょ。そもそも、

赤ずきん：あのさ、ウチ、もういいわ。どっちかにあげるよ。優しくていい奴だったけど、変態はキツイもん。ウチはまだこれからたくさん出会いあるけど、二人はもうアレだから、可哀想だもん。

白雪姫：私もいいよ。実は、王子様に、私以外にも誰か女がいるんじゃないかなあって、うすうすは気がついてたのね。それで、東の国の王子様に色々相談してて。あ、でも、全然、彼とはただの幼馴染で、そういう関係じゃないから。(ノロケる感じ、一人の世界で) だから、逆に、何でも話せるって言うか。あえて言うならお兄ちゃんみたいな感じって言うか、だから、私が悩み事相談すると、ちゃんと私が悪い時は叱ってくれるし、すごい支えてもらってるから、私は大丈夫。

赤ずきん：もうやっちゃってるね。

シンデレラ：間違いない。

赤ずきんと白雪姫、立ち去る雰囲気

白雪姫：やっぱり、最初に運命の出会いをしたシンデレラが王子様の運命の人だと思うし。

赤ずきん：二人でいつまでも幸せに暮らしてね。

シンデレラ：私だって、変態なんかいないわよ。貴女たちのどちらかに譲ってあげるわ。

白雪姫：絶対いない。

赤ずきん：ウチだって。あのさ、別にさ、誰かが引き取らなきゃいけないわけじゃない？

シンデレラ：それもそうね。じゃあ、帰って、弁護士さんと今後のことを相談しなきゃ。

※おとぎの国の住人入場、立ち止まらず、舞台を通り過ぎながら会話程度のイメージ

おとぎの国の住人1：わーいわーい、王子様が茨のお城で100年間眠り続けていたお姫様を助け出したぞー！

おとぎの国の住人2：今夜は王子様と眠り姫の婚礼のパーティーだ、美味しいご馳走がいっぱい食べられるぞ。

シンデレラ：すみません、そのパーティーは、どこでやるんですか？

おとぎの国の住人1：眠り姫のお城の大広間だよ。

おとぎの国の住人2：おいらたち、早く行って準備をしなくっちゃいけないんだ。

※おとぎの国の住人退場

■戦いに行くような勇ましい音楽

☆シンデレラ・白雪姫・赤ずきん、共通の敵を見つけて同盟を組む

赤ずきん：100年眠ってたってことはさ、100歳以上のばばあってことだよな。

白雪姫：今度は熟女。本当にやんちゃなんだから、王子様は。

シンデレラ：ねえ、王子様に会ったら最初に何て言いたい。

☆全員が怖いことを考えていそうな雰囲気目合わせて微笑む

おわり